



式が始まり、先生は卒業生一人ひとりの想い出をかみしめるように卒業証書を渡され、"感謝" "友情" "努力"を忘れないで下さいと式辞で述べられた。桜の枝の話は一言もされなかつた。

私は祝辞の中で、用意してきた原稿も忘れ、少し前に校長室で見た情景と校長先生の言葉を子どもたちに伝えた。

「贈る言葉」の背後には、言葉の何十倍もの思いや愛情がある。それは校長先生はもちろん父兄や教職員も同じことだと思う。私の出席できなかつた5つの小学校でも同じ思いであつたに違いない。その事を子どもたちにわかつて欲しかつた。

子どもたちはそこに在るだけで祝福される存在なのだ。だからこそ、たくましく生きて欲しい。つまらぬ世間の尺度に惑わされることがなく進んで欲しいと思う。

卒業の季節が終わつた。町内でもさまざまな「贈る言葉」が語られたことだろう。

今年の卒業式は中央小学校に出席した。町内6小学校を順番に出席することがルールである。

そんな中で、子どもたちを祝福する無言の言葉があつた。

式が始ままでの少しの時間は校長室で待つことになる。加藤校長先生の部屋の一番陽当たりのいい場所には、水の入つたバケツが置いてあり、そこには何十本かの桜の枝が入っていた。ツボミは今にもほころぶかのように大きくなつていたが、あと2～3日といつたところだつた。

校長先生は「子どもたちが卒業する日までに桜を咲かせたかったのですが、間にあいませんでした」と、先生の人柄そのままに、はにかんで言われた。



上高根沢小学校卒業式



町長記

子どもたちに接するたびに、私は大人が目指すべき"もつともっと大きな通信簿"について考えさせられるのである。

歩いていこうではないか

おまえの通信簿のどこにそのことが記載されているというのだ
人間として生きていくための至上のものだ

おまえの父と母とが目ざしている
もつともっと大きな通信簿に向かって

わが子よ涙を流すことはやめよう
おまえの父と母とが目ざしている
もつともっと大きな通信簿に向かって
おまえの父と母とが目ざしている
もつともっと大きな通信簿に向かって

作者はわからないが、好きな詩がある。
わが子よ
通信簿に記載された評価が思わしくないからと涙を流すことはやめよ

作者はわからないが、好きな詩がある。
わが子よ
通信簿に記載された評価が思わしくないからと涙を流すことはやめよ